MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

２０２２．９．２　発行元
第 392 号　伊藤　剛
https://mystery-dokuan.com

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

長岡弘樹「殺人者の白い檻」

７月にＫＡＤＯＫＡＷＡから出版された長岡弘樹の長編医療ミステリ『殺人者の白い檻』を取り上げる。短編の名手として知られた作者の特徴が随所に発揮された好作品と言える。短時間でパッと読める本。

短編の延長上の作品

長岡弘樹の長編は珍しい。『野性時代』に『死人の家』という題名で連載していたもの。長編としては短い部類で、集中して一気読みができる。長岡の短編の延長上にある作品で、切れ味の鋭さが味わえる。

とにかく無駄がない。ひとつひとつの文章に意味があり、読み逃せない気持ちになる。特に私が気に入っているのは、感情表現の少なさである。こういう描き方が好きなのだ。世の中にはとかくだらだらと人の思いや考えていることを文章にする作家がいるが、それは必要ないこと。読解力のある読者なら、自分の頭の中で登場人物の感情は作り出すことができる。あえて言葉にしてもらう必要などないのだ。

描くのは「事実」を中心にした目の前の出来事。

医者の立場で殺人者を…

主人公は総合病院に勤める医師・尾木敦也。そして彼の妹で有能な看護師長の菜々緒。目の前に脳内出血した患者が連れてこられる。開頭手術の途中で患者が６年前の両親の殺害犯人として死刑判決を受けた定永宗吾であることに気付く。医師として命を助けることを考えるのか、それとも…。

死刑囚はある程度健康な状態に戻らないと刑を執行されることはない。敦也は手術後の患者の様子を観察する。患者本人がリハビリを望むのかどうか…。

敦也は菜々緒と一緒に６年前の事件を振り返る。同じ病院の医師だった父親。両親は留守宅に侵入した窃盗犯に首を絞められて殺されたと裁判の経過では述べられている。定永は一貫して犯行を否認していた。今振り返って検討を加えてみると６年前の真実も気にかかる。さて、待ち受けている結末は？

長岡弘樹の他の作品も

右上に長岡弘樹のこれまでの作品を並べてみた。一番のベストセラーは『傍聞き』だろう。双葉文庫は今も版を重ねている。次の人気は『教場シリーズ』。この『ミステリ読書案内』では第３０３号で取り上げて紹介している。

作品による出来不出来の差が小さい作家で、どの作品を読んでも満足感が得られる。最近の図書館では全著作が揃っていることが多いので、幅広い支持を得ているのだと感じる。未読がある人は図書館に行ってみるとよい。比較的薄い本が多いので、読みやすさもちょうどピッタリ。舞台の設定や、人の言動に対する目の付け所そのものが違うので、毎回ハッとさせられることになる。多作ではないけれども、順調に次作が期待できる作家だ。

長岡弘樹 著作リスト

１．陽だまりの偽り
２．傍聞き
３．線の波紋
４．教場
５．波形の声
６．群青のタンデム
７．教場２
８．赤い刻印
９．白衣の嘘
１０．時が見下ろす町
１１．血縁
１２．教場０　刑事指導官・風間公親
１３．にらみ
１４．道具箱はささやく
１５．救済　SAVE
１６．１１９
１７．風間教場
１８．緋色の残響
１９．つながりません　スクリプター事件File
２０．幕間のモノローグ
２１．巨鳥の影
２２．教場Ｘ　刑事指導官・風間公親
２３．殺人者の白い檻

『傍聞き』

２００８年双葉社。『小説推理』に掲載した短編４編を集めた短編集。日本推理作家協会賞短編部門受賞作で、長岡弘樹の代表作と言うと多くの人が挙げるのが本書になる。題名の読みは「かたえぎき」。字の表しているとおりに「かたわらにいて、聞いている」という意味。収録作品は『逃走』、『傍聞き』、『８９９』、『迷い箱』。いずれもレベルの高い仕上がりの作品。短編の極地と言える。

表題作の『傍聞き』の主人公は所轄署の刑事羽角啓子。同じく刑事だった夫を亡くし、小学六年生の娘・菜月と二人暮らしをしている。近所で起きた盗難事件のことと、啓子自身が追いかけている通り魔事件のことと、そして母親としての思いと娘が考えていることが絡み合って展開していく。各所に張り巡らされた伏線と、微妙に揺れ動く感情の中で、読者が思いもつかない結末へと一気に高まっていく。作者の計算しつくした物語作りに脱帽。デビュー当時の切れ味の鋭さは何度読み直しても素晴らしい。